藤女子大学
図書館だより
Fuji Women's University Library

新入生歓迎号

No.91
2016.4

CONTENTS

1.「西行」を考えるということ
日本語・日本文学科　平田　英夫
4.絵本作家 手島圭三郎先生ご講演
「北の自然と私の絵本」
…… 保育学科　杉浦　篤子
5.中学生の大学図書館体験
6.戦後70年を越えて
…… 文化総合学科　大矢　一人
7.図書館委員会からのお知らせ
8.図書館資料Navi　第7回
有名だけど、実は謎だらけの
「鳥獣戯画」
…… 人間生活学科　長尾　順子

「西行」を考えるということ

日本語・日本文学科　平田　英夫

古典研究における学会の数は多いが、特定の個人に焦点をあてたものは珍しいのではなかろうか。2009年4月に設立された西行学会は、和歌文学研究だけでは捉えきれない日本の古典文化・文学史における巨人「西行」の総合的研究をめざす目的でつくられた。

鳥羽院の下北面の武者として仕えていた佐藤義清は、藤原秀郷を祖とする重代の武者であったが、二十三歳の若さで唐突に出家遁世し、以後、西行と称して、都や、高野山、伊勢といった場を拠点とし、宗教活動を行いながら精力的に作歌活動も行った。諸国の霊場を巡礼することも多く、日本における〈巡礼詩人〉という立ち位置を確立し、宗教歌というジャンルの生成にも大きな役割を果たした。歌人西行の理解の仕方としては、宗教者でありながら、高貴な女人への恋慕に悩み、世を流離（さすら）い、桜と月を溺愛した数寄人という評価が、現在ではおそらく一般的なものであろう。西行への理解は、中世になると、『西行物語』や『撰集抄』といった説話世界の中で再構築され、「流離（さすら）い・漂泊」といった情趣と深く連動しながら、その生涯や振るまいが伝説化・憧憬化され、様々な社会層に浸透していった。西行を描いた絵画や西行人形といった事物も多くつくられ、地方誌の中にも豊かで多様な西行像が見られ、いわゆる「西行伝承」の研究も進められている。

貴族文化の象徴としての和歌文学は、歴史的に享受され続け、中近世期の政治的権力者の文化として位置づけられ、また経済を担う上流社会の文化的

次ページへ続く↗

教養としても受容され続けてきたが、そこにその文学的意義や表現性の新しさについて問う研究はすでにあまり意味があることでなく、その文化的役割や、時代ごとにそれがどのように機能していたのかを探ることが現在の研究では重要な課題となっていよう。東アジアや南アジアといった広大な世界の中で、辺境の俗語の一つでしかなかった和語が、各時代の多くの歌人たちによって、繰り返し歌に詠まれ続けることで、それは〈やまとことば〉という概念を生み出し、歌語や歌ことばとして純化していき、美的イメージのみならず、歴史性、時には神話性まで纏った詩歌語として認識されるに至るのが平安末期である。それは極めて閉鎖的で息苦しいものでもあったが、そうであるからこそ、そこを拠り所として日本人としてのアイデンティティを感じ取り、そのアイデンティティの中に自分も参与するために、同じような破綻のない作品を、積極的に詠み続けた人々が、明治時代にまで存在し続けていた。純化した歴史的歌語の世界に、漢語といった外来語や方言などの雑音を詠み込むことはあり得なかった。

そして、このような和歌のあり方に対して、対抗・あるいは嘲笑する存在として位置づけられ、俗なるものの象徴としてあり続けたのが西行であった。ここにその存在の意味がある。短詩型文学の分野では、文学的嗜好を満足させる役割は、連歌・誹諧・狂歌など多数用意されており、その連歌師や誹諧師たちに西行は頗る人気者であったが、梅澤精一が、その著『西行法師傳』（改訂増補第五版〔明治三十八年初版〕明治四十三年・日進堂書店・興文館）にて「最後に特筆大書すべきは国学の泰斗たる本居宣長の西行を悪評せることなり。氏は神道家なれば一種偏狭なる日本主義よりして西行の和歌を罵倒せり」とするように、特に近世期において、国学者を中心に、西行を嫌悪・排除しようとする層が少なからず存在していた。

御歌所派である高崎正風の『歌ものがたり』（明治四十五年五月・東京社）には、以下のように興味深い記述がある。

西行法師の歌

凡べて歌を詠むに、道理を旨とすることに成つたのは略七百年ばかり前からのことゝ思ふ。行誠上人が曾て自分に向つて申さるゝに、先生はいつも、山邊赤人、柿本人麿、紀貫之、凡河内躬恒のことのみを賞せられて、未だ曾つて一言も彼の一世の人傑たる西行法師のことを云はれたことが無いのは、どう云ふ訳であらうか、自分は彼の法師を以て実に古今を通じて一人の歌人であると思ふ。と斯う云はれた。そこで自分が答へて云ふのに、それは仰せの通り、西行は、人物においては実に敬服すべき人である。けれ共其詠歌に至つては悉く敬服することは出来ぬ。（中略）

なげゝとて月やはものを思はする
かこちがほなる我なみだかな

の歌などに至つては、あまりに理に過ぎて情の薄く成る感がある。何故なれば初句に、「なげゝとて」とまで云つて仕舞つては、いひつくして余韻が少しも無い。もしこれを貫之躬恒などに詠ませたならば定めて斯うは云はなかつたであらうと思ふ。自分は寧ろ初句を、「あきのよの」と改めた方が適当であらうと思ふ。すべて何う云ふ場合でも、余りにことわりがしたゝかに成ると、自然余韻の短くなるのは、免がれ難きことである。

傍線部にあるように、行誠上人から、西行の力量を認めないのはどういうことかと問われた時、点線部のように、西行は人としては敬服するがその詠歌については完全否定している。しかも波線部にあるように、『百人一首』にも入る有名な「歎けとて月やは物を思はする」の歌の初句を「秋の夜の」と添削までしようとする。後鳥羽院に「生得の歌人」と高く評価され、藤原定家によって選ばれた一首に、添削まで施そうとする態度に、西行の扱いの軽々しさがよくあらわれていよう。明治の後半期にあっても、いわば素人扱いなのである。そしてこれは、西行の歌が、和歌文学の正統な流れに比して、いかに違和感・異質性を与えてくれる存在であったのかがわかる記述で

もあろうかと思われる。

もう一例、近世期の『善光寺名所図絵』（巻之三）「飯縄原」に記される西行の姿を見てみたい。

むかし西行上人この国遊歴のみぎり、戸隠にまゐらんとて、飯縄原を通られしが、みちの傍なる児の蕨を採り居けるを見て

わらびにて手なやきそ

とたはぶれ給ひしかば、児

ひの木笠にてかしらなやきそ

となん、いらへける。それより戸隠の日の御子の社頭に桜の盛りなりけるが、初き子の、上人を見て、この桜につとのぼりければ、西行

さるちごと見るよりはやく木にのぼる

と口すさみありければ、西行

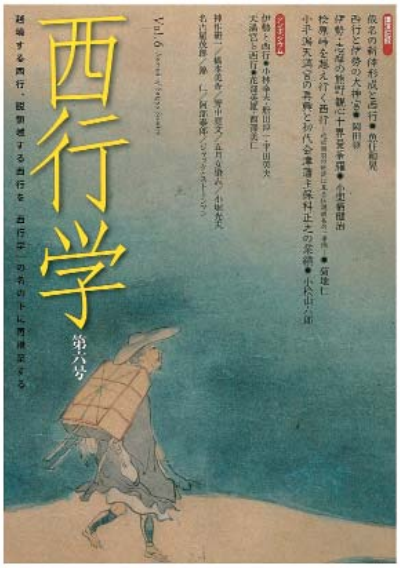
犬のやうなる法師きたれば

とつづける、上人ふしぎの思ひをなし、これただ人にあらず、登りてはあしかりなんとて、これより引き返し、安曇郡佐野のかたへ通り、有明山の歌ありとなん聞こし

このやり取りは、「西行伝承」の中でも、やり込められる西行という型に属する。それがすでに和歌でさえない狂歌的な問答であるところも注意したい。西行は、戸隠神社参詣の折、まず飯縄原を通る。その時に、蕨を摘む児を見て、戯れに「わらびにて手なやきそ」と言いかけるが、その児に思わず、「ひの木笠にてかしらなやきそ」と反撃されてしまう。西行は、「わらび」の「び」に「火」を掛けて歌人として悦に浸ったが、児により、「ひの木笠」の「ひ」にやはり「火」を掛けたかたちで、坊主の「禿げたかしら」を焼かないようにと返されてしまう。また戸隠の日の御子社前では、桜の木にのぼった児を見て「さるちごと見るよりはやく木にのぼる」と口ずさむが、その児には「犬のやうなる法師きたれば」と「猿」に対して「犬」を持ち出されて、やはりやり込められてしまう。大事なこととしては、西行の和歌が、このような性質のものと結びついたり、引き寄せてしまう力を持っていたということである。西行は、閉鎖的な方向に純化していこうとする和歌の方向性に澱みあたえることができる数少ない存在であった。

2015年度の日本文学演習では前期に定家、後期に西行の作品を取り上げたが、学生にとっては断然、定家の方がわかりやすく、難易度が高いのが西行であった。定家は、新編国歌大観の検索機能や歌ことば辞典を駆使することで何とか対応できるが、雑多な性質をもった西行の和歌についてはそうはいかない。一首一首が持つ世界観に丹念に向き合い、その家集『山家集』を十分に読みこなしたうたで調査・考察していかなければならないところがある。教員としても作品解説が難しく、学生の西行嫌いを生んでしまう傾向にある。

「西行」という存在は、正統なものに対する「もどき」のようなものであろうと考えている。日本の芸能には、能楽の「翁」の「白式尉」と「黒式尉」に象徴されるように、正統なるものに対して、それを滑稽化する「もどき」という不思議な存在が指摘されている。道化なのであるが、エネルギッシュであり、正統な和歌的世界を大きく揺るがすことができる西行を考えるうえで参考になる概念かと思う。「正統」と「もどき」という対応で、定家と西行は和歌を学ぶうえでは適切な組み合わせなのである。



○掲載冊子説明文

『西行学』第6号／西行学会編（二〇一五年八月発行・笠間書院）。2010年8月に創刊号がつくられた。西行（1118 ～ 1190）は、2018年に生誕900年を迎かえる。西行を想う記念の年であり、様々な企画がなされる予定である。

絵本作家　手島圭三郎先生ご講演

「北の自然と私の絵本」

保育学科　杉浦　篤子

2015年7月13日（月）、保育学科1年生の授業「子ども文化論」に特別講師として、版画家であり絵本作家である手島圭三郎先生を招き、テーマ「北の自然と私の絵本」と題して、その生い立ちで育まれた自然観と版画制作、絵本制作について講演していただく機会を得た。手島先生は江別市大麻在住、江別市内の中学校で長く教鞭をとられ、たくさんの教え子たちを輩出してこられた。1935年（昭和10年）国鉄職員だった父親の勤務地である北見紋別管内で生まれ、成長した。手島少年の記憶に北の大地の息吹が吹き込まれた。その北の風物が70歳を超えた今も鮮明に思い出され、版画制作、絵本制作の土台となっている。教員時代に学生たちに演劇指導を行ったことが絵本制作をするようになったとき、ドラマ性を生み出すことに役立ったと言う。自分のモチーフは何かと探ったとき行き当ったのは、生まれ育った北海道の自然と動植物であり、故郷への視点で描くということだった。

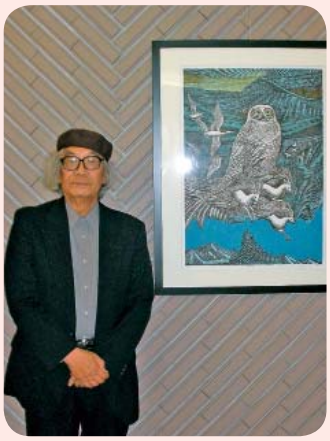
ご講演のようす

絵本製作は1981年、日本版画協会展に出品していた作品「ふくろうのみずうみ」を見た編集者が、絵本制作の依頼をしてきた。当時福武書店は児童書部があり、新人の発掘の方針を打ち出していた。手島作品そのものを使って、擬人化したかわいい動物ではなく、大人にも読みごたえのある絵本を出版したいという主旨だった。その編集者が手島先生に会いに来た時、「先生を見分けるには？」と尋ねたところ「すぐにわかりますよ、シマフクロウに似ているから」と答えられたという。長身で、少し髪が長く、いつもベレー帽をかぶっておられるその姿は、本当にシマフクロウに似ておられる。

1982年『しまふくろうのみずうみ』が出版され、絵本にっぽん賞を受賞する。その後、1983年『おおはくちょうのそら』、1990年『きたきつねのゆめ』など、1年に1～2冊のペースで出版を続けた。『きたきつねのゆめ』は絵本作家なら誰でもが憧れるボローニャ国際児童図書展で、グラフィック賞を受賞するなど、多くの賞を受賞している。もちろん同時に版画の制作が行われ、日本版画協会展、全道美術協会展、北海道版画協会展などの活動を継続している。

図書館前で記念撮影（後ろは手島先生のご講演にあわせた図書館特別展示）左から柴村先生、手島先生、杉浦先生

70歳を超えた現在は、生命賛歌をテーマとした作品制作に意欲を燃やしている。その第一作目は『みずならのいのち』に800年生きた「みずなら」の大木に明日を生きる姿を描き出した。「人生の中で美しさに出会うこと、美しさを見つけることが出来るかが、豊かに生きることの要になるだろう」と言う、その姿には今後の作品への意欲があふれていた。



花川校舎2Fの版画と手島先生

※文章内で紹介した本はすべて花川館の絵本コーナーに置いてあります。

中学生の大学図書館体験

11月5日から6日の2日間、石狩市立樽川中学校の生徒3名が花川館で職業体験学習を行いました。3人とも図書局に所属しており、「将来は司書になりたい」という思いから実習先に図書館を選んだそうです。

2日間の間に、本の貸出・返却など表から見えるお仕事や、配架・整斉（本を棚に戻したり、正しい順番に並べ直す作業）、本の修理などを体験していただいたほか、レファレンスサービスやガイダンス業務などの説明を聞いていただきました。

実習を終えたみなさんから、それぞれ感想をいただきました。

佐藤さん

私は、中学校一年二年と続き、図書局員をやっています。また、本も好きであったので、今回、職業体験を、藤女子大学でやらせていただくことになりました。

藤女子大学図書館の花川館では、教育や、栄養学などの本があり、少し普通の図書館には無いようなものも多く、とても興味深かったです。また、カウンターや、本の配架だけではなく、本の修復作業や、データベースの検索なども体験させていただいて、とても楽しかったです。ありがとうございました。

私は、図書館司書になりたいと思っているので、今回の職業体験が楽しく、とても充実させることができました。二日間の経験を、これからに生かしていきたいと思います。

武藤さん

私は、今回の職場体験を通して、学校の図書室でしたことのないたいへん貴重な経験をさせてもらいました。例えば、本の補修の作業です。はがれてしまったラベルや破れてしまった本の表紙などをもとどおりの本にすることが初めてやって難しかったけどとても楽しかったです。私は今、中学校で図書局の仕事をしていますが、本の補修や配架などはあまりしていなかったので経験できてよかったです。私は、将来に司書になりたいと思っていて、この職場体験で司書の仕事をさせてもらい、さらに司書という仕事が楽しく真剣にやってみたいなとあらためて思いました。二日間という短い間でしたがとても楽しく充実していました。本当にありがとうございました。

田中さん

将来の夢が図書館司書なので、職場体験の第一希望には、迷うことなく図書館と書きました。中学校で図書局に所属しているので、カウンターでの貸し出しや配架等は行っていましたが、やっぱり手順が多かったり、中学校の図書より分類が細かかったりしてとても難しかったです。丁寧に教えていただいたおかげで、二日目にはなんとか一人で作業できるようになりホッとしました。また、本の修理では、やったことがなかったので緊張しましたが、破れていたところが直った本を見ると達成感がありました。どの作業も難しく、またとても楽しかったので、この二日間はあっというまでした。そして充実した時間でした。二日間ありがとうございました。

戦後70年を越えて

文化総合学科　大矢　一人

私は本学で教職課程を担当しています。はじめに、教職を志す人に読んでほしい本として、遠山啓の『競争原理を超えて』を紹介します。2003年の「図書館だより」No.65で「教育・教育学に目覚めたころ」と題して執筆しましたので、くわしくは、図書館のHP上で見てください。遠山の著作集は花川館に所蔵されています。

今回は、私の専門分野に関連する本を紹介します。私は教育の歴史、特に「占領期の地方における教育改革に果たしたアメリカ側の役割」を研究しています。71年前の1945年8月まで、日本はアメリカを中心とする連合国軍と戦争をし、敗けました。そのため、日本は有史以来はじめて、他国に占領されることになったわけです。その中心国がアメリカでした。占領された日本がどのような国に生まれ変わったのか、特に地域の教育に関してはどうだったのかが私の問題関心事です。

昨年は戦後70年という節目の年で、北海道新聞では、年間企画「北海道と戦争」を2014年8月から2015年9月まで連載しました。そしてこの連載は、『戦後70年　北海道と戦争』（上・下）として二冊の本にまとめられました。

私は「下」に掲載されている「第9章　学徒と教育」の「4　GHQ指示文書は語る」に関する取材を受けました。GHQというのは、連合国軍最高司令官総司令部の略で、マッカーサー元帥を頂点として、日本を占領した組織の名前です。GHQは、日本の教育に関して行政機関を通じて各学校に通達を送り、これまでの軍国主義・超国家主義・天皇中心主義の教育をやめるように指示しました。たとえば、戦時中に今の中学校以上の男子の学校で行われていた「学校教練」は「絶対ニ禁止」とされました（「下」の179頁）。また、「国防軍備等ヲ強調セル教材、戦意高揚ニ関スル教材」には墨を塗るように指示する通達も文書にはあります（「下」の183頁）。「墨塗り教科書」のことは、おじいさん・おばあさんから聞いた人もいるかもしれませんね。ただし、これはGHQの意向は強く受けていますが、日本側が独自に行ったものです。

『戦後70年　北海道と戦争』には、占領期だけではなく、戦時中の教育に関する記事もあります。また、軍隊を支えた家族を描いた「第6章　銃後」（「上」の382頁～）、戦時中のスポーツ選手がどのような境遇におかれたのかを描いた「第8章　アスリートたち」（「下」の82頁～）などは、あなた方にも身近に感じられるのではないでしょうか。なお、札幌市民が小・中・高校生や大学生に語った戦争体験も本にまとめられているので、あわせて紹介します。札幌市発行の『語り継ぐ　札幌市民100人の戦争体験』（上・下）です。

2015年9月19日未明、集団的自衛権の行使を可能とし、自衛隊の活動範囲を拡大したいわゆる「安全保障関連法案」が参議院で可決・成立しました。そして今、この法律が施行され、戦後70年を越えた2016年の春を迎えています。「二度と戦争はしない」という不戦の誓いのなかで、戦後の歩みがあったことを、こうした本を読んでわかってもらいたいと思います。

『競争原理を超えて』遠山啓著　370.4/To64
『遠山啓著作集』✽遠山啓著　370.4/To64/0-4
『戦後70年　北海道と戦争（上・下）』
北海道新聞社編　211/H82/1-2
『語り継ぐ札幌市民100人の戦争体験（上・下）』
札幌市編　210.7/Sa68/1-2

※✽は花川館所蔵です

図書館委員会からのお知らせ

「藤女子大学機関リポジトリ」公開に向けて

みなさんは「リポジトリ＝repository」という言葉をご存じでしょうか？リポジトリは「倉庫・貯蔵庫・資源のありか」という意味ですが、大学及び研究機関等では専門の教育や研究活動が行われており、それらの教育研究成果を電子的に蓄積し、保存し、原則的に無償で永続的かつ安定的にインターネット上で発信するシステムサイトを「機関リポジトリ」と呼んでいます。機関リポジトリを公開することで、大学の教育研究成果の発信、研究者の認知度の向上、教育研究活動に関する説明責任の保証、知的生産物の長期保存等、社会への貢献が期待できます。

本学の機関リポジトリについては、2015 年度第 5 回図書館委員会（2015 年 3 月 18 日開催）において JAIRO Cloud（国立情報学研究所で開発した、共用リポジトリサービス）を利用して機関リポジトリで構築することが決まりました。その後、大学側から承認を頂いたことで、国立情報学研究所への利用申請を行い、2015 年 9 月に受理されました。

現在、図書館が中心となって本公開への準備を進めており、担当職員の研修、リポジトリの画面構成や運用指針、収蔵コンテンツ等についても検討をしております。

「藤女子大学機関リポジトリ」の立ち上げは本学で刊行されてきた紀要や、教員のみなさまが学会誌等に投稿された論文などを機関リポジトリに構築する環境を整え、長期的に更なる充実を図ることとします。なお、運用開始時期については 2016 年 9 月頃を予定しております。詳細につきましては掲示板やポータル等でお知らせいたします。

＜藤女子大学機関リポジトリ収録予定紀要類＞

- 藤女子大学紀要第Ⅰ部　※許諾を頂いた論文のみ登録します。
- 藤女子大学文学部紀要
- 藤女子大学紀要第Ⅱ部　※許諾を頂いた論文のみ登録します。
- 藤女子大学人間生活学部紀要
- キリスト教文化研究所紀要
- 人間生活学研究
- 藤女子大学社会福祉研究所年報
- 藤女子大学 QOL 研究所紀要
- 家庭科・家政教育研究

「藤女子大学図書館」ホームページのリニューアル

藤女子大学図書館のホームページが 2015 年 8 月よりリニューアルされました。みなさんもう図書館のホームページをご覧になりましたか？　今回、トップページを以前より使いやすくし、メニューはプルダウン表示方式とし、よく使うコンテンツをトップページにまとめました。

トップページの画面構成

①本学図書館の蔵書検索（OPAC）
②ディスカバリーサービス（図書館が提供する様々情報を一つの検索画面からできるサービスのことで、情報の発見「Discovery」を支援するサービスです。
③図書館からのお知らせ（図書館からのお得な情報を案内しております。）
④各種電子ジャーナルやデータベース（日頃の学習、試験、卒論時に役に立つ論文・情報を検索ができます。）
⑤図書館カレンダー（シンプルかつ従来よりも見やすくなるよう閉館時間を表示しました。）

学生や教職員のみなさん、どうぞ図書館のホームページを学習や研究にお役立てください。

「朝の図書館開館時間変更」（試行）について

花川キャンパス（人間生活学部）の「学生の声」に、花川館を 9 時前に開館してほしいという要望が寄せられました。図書館で検討した結果、10 分ではありますが、9 時開館を 8 時 50 分開館にすることとしました。2016 年 1 月 21 日（木）～ 2 月 8 日（月）まで花川館において期間限定で実施しましたが、利用者が多いこともあり、2016 年 4 月より本館でも開館時間を 10 分繰り上げて 8 時 50 分開館とすることにします。

なお、この開館時間は試行となりますので授業期のみとさせていただきます。夏期・冬期・春期休暇期間は 9 時からの開館です。

2016 年 4 月より　本館・花川館（授業期のみ）8：50 ～

たくさんのご利用をお待ちしております。

図/書/館/資/料 Navi（ナビ） 第７回

有名だけど、実は謎だらけの「鳥獣戯画」

人間生活学科　長尾　順子

すすきを振り上げた兎から逃げる猿、あるいは相撲をとる兎と蛙、どこかで見たことがあるでしょう。これらは一般に「鳥獣戯画」の名称で親しまれている国宝「鳥獣人物戯画」「甲巻」の一部分です。京都市の古刹高山寺に伝えられたこの絵巻物は、現在、甲・乙・丙・丁の四巻仕立てで、全部をつなぐとおよそ44mもの長さになります。詞書（説明文）は一切なく、動物や人を墨一色の自由な線で描いた、まさに戯画（たわむれに描いた絵）といえる作品です。

「鳥獣戯画」は、いつ、誰が、どこで、何のために制作したのか、実はよく分かっていません。従来の研究では、制作時期は平安末期から鎌倉期にかけて、作者は鳥羽僧正（1053-1140）といわれていますが、根拠となる史料に乏しいのが現状です。さらに断簡の存在と近世の模本との比較から、この戯画には欠落部分があると指摘されています。この絵巻に使用された紙は、短い和紙を何枚も糊でつなぎ合わせており、接着が弱まって修復をした際に、何らかの事情でいくつかの場面が失われてしまったのでしょう。最近、130年ぶりに大々的な修復作業が行われ新しい発見もありましたが、多くの謎を残したままです。

さて、今回は皆さんよくご存じの「甲巻」について触れます。この巻は、擬人化された動物たち（兎、蛙、猿など）が、本来人間がおこなう遊戯と年中行事に興じる姿を、A3用紙28枚ほどのスペースに躍動的に描いています。冒頭は山中の景色から始まり、兎と猿の水遊び、兎と蛙の射弓競技、兎と猿の追いかけっこ、兎と蛙の相撲、猿僧正の読経と布施、と、流れるように物語が展開していきます。絵を辿るだけでも愉快な物語絵として楽しめますが、本作品の魅力はそこにとどまりません。動物たちの姿に寓意や風刺を感じさせるような余白をこの戯画はもっています。また写実的な表現も見ごたえがあり、被服学の視点で捉えると、烏帽子姿の兎に強く惹かれます。烏帽子とは、黒色の布や紙で作った帽子で、平安時代以降、成人男子の証として被られていました。この兎は、長い耳を左右にぺたりと垂れ下げ烏帽子を身に着けています。なるほど、「甲巻」の兎はみな両耳の間の幅が狭いため、いざ帽子を被せようとしても長い耳が邪魔をします。そこで作者は、烏帽子の中に耳を隠すでも、耳が烏帽子を突き破るでも、両耳の間隔を広げるでもなく、耳を折り曲げて烏帽子を頭にのせたのです。実に観察眼に富んだ自然な描写ではないでしょうか。

さて「甲巻」にはもう一羽、被り物をした兎がいます。探してみませんか？　実は本学図書館は、この「甲巻」の実寸大複製絵巻物を所蔵しています。図版とは異なる「鳥獣戯画」の魅力を、実物大の絵巻物は皆さんにおしえてくれることでしょう。

『鳥獣戯畫巻』　請求記号：721 / C53（花川館大型架所蔵）
＊ご利用の際は、カウンター職員にお尋ねください。

● 編集後記 ●

図書館だより91号「新入生歓迎号」をお届けいたします。
編集をしている頃は冷え込みが厳しい季節でしたが、新入生を迎える春の気持ちでぬくもりを感じながら作業ができました。
今回は「「西行」を考えるということ」、「戦後70年を越えて」をご専門の視点から寄稿いただきました。
また、花川校舎で行われた版画家・絵本作家である手島圭三郎氏の講演の様子を寄稿いただき、掲載いたしました。ぜひ講演の様子を感じ取ってみてください。
中学生の大学図書館体験は仕事を通じて感じた図書館の感想をいただきました。利用者とは違ったいろいろな気づきがあったようです。
図書館資料Navi第7回には、「有名だけど、実は謎だらけの『鳥獣戯画』」と題して寄稿いただきました。教科書で目にする資料の裏側に誘われてしまいますね。花川館にある巻物にも目を通してみてください。　(k.k)

図書館キャラクター「きしんさん」

ケータイから本が探せます！

QRコード

藤女子大学　図書館だより　第 91 号 2016.3
発行者　藤女子大学図書館 札幌市北区北16条西２丁目
TEL 011-736-5407　FAX 011-709-4770
http://www.fujijoshi.ac.jp/library/